

パルクールの歴史をスポーツ空間のなかに 位置づけるための歴史の素描

：フランス、イギリス、日本の実践に触れながら

The Historical Sketch for Positioning the History of Parkour
into the Sport Space

：Touching on Practices in France, UK and Japan

平石 貴士*

はじめに

中国の CiNii と呼ばれる CNKI で「跑酷 (中国語でパルクールを意味する)」を検索すると、実に 428 件も記事がヒットする (2021 年 8 月 30 日アクセス)。この記事のうち、学術雑誌に掲載されていると分類されるのは 129 件、修士論文が 42 件ある。もちろん、これらの論文がすべてパルクールを主題にしたものではないにせよ (例えば、若者研究のなかで少しパルクールが触れられているだけなのかもしれない)、日本の論文検索と比較すると、そのあまりに大きな違いに愕然とする。たとえば、CiNii や J-STAGE といった学術論文サイトでパルクールを検索すると、一本もパルクールを主題にした学術論文は出てこないのだ。

CNKI の検索結果で上位に来る論文のタイトルを Google 翻訳で少し見みると、「陝西省のパルクールの開発状況に関する研究」「パルクール行動研究に基づくスポーツ用品の革新的なデザインの新たな探求」「国際体操連盟の競争改革とイノベーション開発のレビュー」といった論文が出てくる。もち

* 立命館大学産業社会学部授業担当講師

ろん、論文のクオリティがそれほど高くないものばかりが散見されるし、また中国の学術論文の基準や出版事情や学会事情を知らない筆者にとって、単純に日本の状況と比較することはできないことは十分によくわかってはいるものの、日本では論文も、学術書も、一般書も、とにかくパルクールについて書かれた文献がまったくないという状況は大変奇妙に思える（日本語で唯一ある文献は、訳書である Wheaton 2013=2019 だけである）。

中国よりも日本のパルクール受容が遅かったということはまったくない。2000年代初頭からパルクールはメディアを通じて、世界中に広がり、日本でも2000年代初頭から実践者が存在していた。もちろん中国と日本とのあいだで実践者数が大きく違うかもしれない、それが研究論文の差になっているかもしれない。またシカゴのパルクール実践者を社会学的に調査した Kidder (2017: 50) によれば、パルクール実践者たちは技や動作を知るために本を買うことはなく、ネットにある記事や動画だけを参考にしている、という。その意味では、出版というものを必要とする文化ではなく、一般書が市場として成立しづらいという事情は一定の説明はつく。しかし、これらの要因をすべて考慮したとしても、日本でパルクールに関する学術論文がないことは、奇妙な状況である。

ここではこの理由についての社会学的考察を行うつもりはない。日本の学会事情やスポーツ研究者の動向に何かしらの理由があるにせよ、すでに日本においても20年ほどの歴史がある文化現象について、日本語による基礎的な文献すらないという状況は、非常に研究の進展を困難なものにしている。英語圏では一定数の専門論文が存在し、著書も複数あることから、まずはパルクールについての基礎的な事実を書いた文献が必要である。

そこで本稿では、パルクールの基本的な歴史の素描を試みる。そして本稿が歴史記述の際に提起している問いは、パルクールという運動文化を、スポーツ史、軍事史、体操史、体育史といった歴史空間のなかに位置づけた時に、どのような性格を与えられるのか、ということである。正直に言えば、

この問いは、筆者の能力と力量を大きく超えている問いなのであるが、日本語での議論が存在しないなかで、まずは論点を提示していかなければならないという目的意識のもと、歴史の素描から始めてみることにする。パルクールは、どういった点で「新しい」スポーツ文化、運動文化なのだろうか。パルクールは、私たちの既存のスポーツ空間のなかで、どういった立ち位置を、構造的に取っているのだろうか。これらの問いが歴史を探っていく時の問いである。

パルクールという言葉自体は、かなり知られるようになってきたように思える。そして言葉を知らなくても映像を見たという人は人口のほとんどにまで広がっているだろう。しかし文化としての実態はまだよく知られておらず、華麗で魅惑的な動きのイメージがある一方で、危険な、向こう見ずな、無謀で挑発的な行為をするものというメディア上のイメージにとどまっているのが現状だろう。まだあまり理解されていない文化へ入っていくためのひとつの方法が、歴史から内実に接近してみるということではないだろうか。

本論の構成は、第一章がフランスで原初のパルクールが生まれた歴史を扱い、第二章でパルクールのルーツとしてのジョルジュ・エベルの体育思想を扱い、それをパルクールへと継承したレイモン・ベルの思想を扱いつつ、論じる。第三章では、そのように生まれた原初のパルクールが、メディアを通じて、世界へ伝播していくごく初期の過程を扱う。第四章では、この章まで見てきた論点や歴史について、日本のパルクールの歴史を素描するなかで考察する。

なお、歴史記述の方法としては、第一章から第三章は、海外の既存文献の検討によって行い、第四章では、筆者が2019年から行っている日本のパルクール実践者に対するフィールドワークおよびインタビュー調査のデータも用いて行う。

1. パルクールが生まれた場所：フランス、郊外、肌の色、階級性

まず基礎的な事実として、書かなければならないことは、parkour という綴りが生まれたのは1997年のフランスにおいてである (Angel 2011 : 197,291)。しかし、後に parkour と呼ばれる動作や練習方法、思想や考え方は、その名前がつけられる前から、パリの郊外（仏語で banlieue と表現される）に住むティーンエージャーのグループ（1997年に YAMAKASI というグループ名を発案することになる）によって、1986、1987年頃に「遊び」として、実践され始めた (Belle 2009, Angel 2011 : 10,291¹⁾)。このグループは、初期には数人だったと本人たちのインタビューで語られており、ほぼ全員が（かつての、または現在の）フランスの植民地（ベトナム、ニューカレドニア、グアドループ島）にルーツを持ち、民族的ルーツや肌の色が多様なグループであった。彼らの両親は、1960～1970年代に急速に発展するパリ郊外の南 15~25km にある通勤圏の都市 (Sarcelles、Évry、Lisses といったコミューン) へと、様々な理由で植民地から移り住んで来ていた。

これまでの社会学的な先行研究 (Wheaton 2013=2019, Kidder 2017) においても、YAMAKASI の社会学的属性として以上の3つが繰り返し語られてきた。①パルクールが発生した場所、つまり YAMAKASI が居住していた場所は、いわゆる日本語で言うところの戦後の「ニュータウン」であり、またフランスでは「バンリュウ（郊外）」と呼ばれ、低家賃公営住宅 (HLM) に住む移民たちが暴力、暴動、麻薬に囲まれた生活をしているという差別的なイメージが与えられることの多い場所であったこと。②グループに「純粋な」白人はおらず、ベトナム、ニューカレドニア、グアドループ島出身の親を持ち、民族的ルーツと肌の色において多様なグループであったこと。③郊外に作られていったコンクリート製の集合住宅、特に建築史においてブルータリズム (brutalism) と呼ばれる建築の物理的特性が、登ったり、跳んだりするパルクールの動きの特性を作ったこと。

これらの繰り返し語られてきた特性に付け加えるべき点は、主要メンバーの出身背景としての下級公務員的特性である。ダヴィッド・ベル(David Belle)の父親レイモン(Raymond Belle)は消防士であり、またレイモンには様々な問題(2-2.で詳しく論じる)があったため、母方の祖父がダヴィッドを育てたが、この祖父もまた、消防士であった。またダヴィッドの兄のジャン・フランソワ・ベル(Jean François Belle)も消防士となっている。このベル家がベトナムにルーツを持つものに対して、もうひとりの主要メンバーであるヤン・ノウトゥラ(Yann Hnautra)は、ニューカレドニアにルーツを持つが、彼の父親は職業軍人だった(Angel 2011: 16)。フランスでは歴史的経緯によって、パリとマルセイユの消防隊は軍に所属している(自治体国際化協会, 2002, 『フランスの消防・防災制度』)。ダヴィッドの父レイモンは、軍の孤児養護施設で育てられ、後にパリの消防隊として働くわけであるが、ここで言う消防士は、制度的に軍人に近い位置にあり、下級公務員に属する。このことは、YAMAKASIの親たちの共通の特性として、無視してはいけないただろう。したがって、YAMAKASIは多様な文化的ルーツを持つとよく主張されてきたのであるが、一方で、彼らの家庭環境は、肉体のトレーニングと国家への忠誠を求められる「肉体系」の下級公務員という共通の職業的バックグラウンドを持っている。YAMAKAIのメンバーは、バルクールを15歳ほどの頃に始めているが、それまでは「ふつうのスポーツ」を地域のスポーツクラブに登録しながら行い、たとえそこで卓越した成績を残してはいないにせよ、それなりのスポーツ経験を持っていた(Belle 2009: 40, Angel 2011: 21)。彼らの家庭環境は、体を鍛えること、スポーツをすることに対して、肯定的な環境であった(ダヴィッド・ベル自身も、子供の頃に将来は、消防士になると漠然と考えていたようだ)。

またスポーツ史あるいは軍事史のなかで、消防士という職業をめぐる技術や体力の追求があったこと、それが兵士に要求される能力と非常に似通っていたということも、筆者の能力を越えたテーマであるとは言え、歴史的に意

識しておくことは重要だろう。例えば、20世紀初頭の万博と併催されていた初期オリンピックでは、消防士の技術競争のような競技も行われていた。あるいは、荒野での軍事訓練では、負傷した兵士を担いで移動する訓練も行うわけであるが、これらの技術は、消防士が負傷した市民を運ぶ技術と共通である。消防士は、はしご車が発明される前は、街中の火事になった構造物を登って、救出しなければいけないような場合があった。特に、石作りのヨーロッパ建築では、日本とは違って、そもそもパルクールに近いような、建物登りという環境があったと言えよう。ダヴィッドの父親のレイモンが、軍隊経験があり、卓越した消防士として知られていたということは、パルクールの発生において、少なからぬ重要性を持っていると言える。これらの観点は、先行研究ではしっかりと言われてこなかった。

パルクールのルーツとしての「郊外性」「民族性・肌の色」「階級性」といった特性は、いわゆるマイノリティが生産した文化という点で、20世紀アメリカ産のジャズ、ロック、ヒップホップといったグローバル大衆文化と重なる部分がある。ゆえに、それらの文化に対してカルチュラルスタディーズが行ったような手付きを、パルクールという文化に対しても向けることは可能であろう。しかしながら、英米におけるパルクール受容者の中心は、白人の中産階級であると報告されていること (Wheaton 2013=2019, Kidder 2017) には注意しておく必要がある。

またブルデューとヴァカンが、やや皮肉めいて、アメリカのマイノリティ発の大衆文化やそれを称揚する知識人を分析している論考を考慮しながら、分析する必要があるように思える。ブルデューらは以下のように述べている。

アメリカの巨大文化産業の生産物、例えば、ジャズやラップであったり、ジーンズのような流行のファッション、ファストフードなどは、それらが若者に与えるほとんど普遍的な魅力のある部分を、それらが被支配的

なマイノリティによって生み出されて、もたらされたという事実を負っているのと同様に、これらの新たなウルガタ聖書となっている論点は、カルチュラル・スタディーズ、マイノリティ・スタディーズ、ゲイ・スタディーズ、ウーマン・スタディーズといった、周縁的で、体制転覆的とみなされる領域の専門家たちによってもたらされているがゆえに、それらの論点が例えばヨーロッパのかつての植民地出身の作家の目からは、解放のメッセージという振る舞いを取っているように見えるという事実象徴的有効性の多くを負っている (Bourdieu et Waquant 1998 : 116-117=2009 : 283)。

マイノリティ発の文化であるという印は、世界中の若者、つまり社会においてまだ権力を獲得していない者たちにとって魅力的に思える。しかしながら、ブルデューらが分析に付け足しているのは、それらの魅力の発揮が結果的には、英米の文化産業に利することになっており、宗主国による植民地に対する文化的な支配の一翼になっている、という微妙な関係性への洞察である。したがって、パルクールもまた、フランスのマイノリティたちによって生み出された新文化であることは間違いない (実際に、YAMAKASI のメンバーたち自身が郊外に満ちた暴力やドラッグの世界から抜け出すためにパルクールに没頭していたと語っている (Angel 2011 : 21,23) にしても、それを盲目的に称揚することは、別の文化的支配の側面を覆い隠しかねない) であり、日本のような国際的ポジションから行う今後の研究の方向性としては、注意が必要であろう。

2. パルクールの起源としての軍事・体育思想史：ジョルジュ・エベルとメトード・ナチュレール、レイモン・ベルを介したパークールへの継承

パークールがフランスで発生したことのもう一方の理由として繰り返言われてきたのは (Atkinson 2009, Angel 2011, Kidder 2017)、フランスの体育思想史における、海軍大尉にして体育思想家であったジョルジュ・エベル (Georges Hébert) が発展させたメトード・ナチュレール (Méthode Naturelle) という訓練方法の存在である。

この系譜について簡単に言えば、レイモン・ベルは幼少期からベトナムの仏軍キャンプで学び、訓練を重ねてきたエベルのメトード・ナチュレールという方法をレイモン流に発展させ、それを息子ダヴィッドに教え、それが後のパークール形成につながる訓練方法や思想となった、というものだ (Angel 2011 : 16-21)。

エベル、レイモン、ダヴィッド、YAMAKASI という単線的な系譜は、わかりやすいストーリーであると同時に、パークールのすべての起源がエベルにあるという錯覚を生み出しやすい。学術的にこの歴史を検討するには、エベル自身の研究、その後世界に広がっていく「エベル主義」の研究、YAMAKASI の研究、その後世界に広がった諸々のパークールのスタイルの研究をそれぞれ検討しなければ、真相に接近することはできない。とは言え、研究の最初の段階にあっては、まずはこの系譜のストーリーを前提に置き、どの程度、エベルの思想からパークールの思想までのあいだに連続性があるかどうかを、諸々の基本的なテキストや筆者がフィールドワークで実際に日本の実践者たちから得た言葉を照らし合わせて、描いてみることにしよう。

エベルの思想およびレイモンとパークールの思想とのあいだの親和性は、いくつかの共通のテーマ性が出現することによって、その結びつきを見ることができる。ここではこれから見ていく前に、先に以下の2つの共通性を提

示しておこう。

①人々の救出というエピソードと「役に立つために強くあれ」という標語という共通性

些細なことに思われるかもしれないが、ジョルジュ・エベルの自伝には、災害に見舞われた危機の状況で多くの人を救出した、という伝説的エピソードが語られており、またレイモン・ベルにも、同じようなエピソードが、息子のダヴィッドを通じて語られている。これらの共通エピソードは、同じ2つのことを伝えている。第一に、彼らの訓練された身体能力の高さや危機的な状況での環境察知能力や判断力の高さ。第二に、その時のそれぞれの現実の環境に適應する力、および、そういった危機に向けて、準備と訓練を行う力。

②実践的な環境で実践的なトレーニングを行うという思想

エベルにおいては、トレーニングの場所は野山など自然環境であるとされた。パルクールでは訓練を行う場所は、都市の様々な建築造物である。両者に共通するのは、近代スポーツのように、ルールによって均質に整序された競技空間ではない場所で動くという発想である。日常的な実践とトレーニングの場所は、自然環境ないしは都市環境であり、そういった実践的環境から切り離されたトレーニングには価値がないとみなす傾向がある。

2-1. ジョルジュ・エベルの体育思想

エベルは、1875年にパリで生まれ、彼の父親はパリの馬車を引く馬の飼育業をしていたが、交通機関のモータリゼーション（鉄道の発達）によって、書店業へと転業せざるをえなくなった家庭の出身であった。そして幼少期に旅行や冒険の書物に触れることで、海軍士官のキャリアを志向するようになった（Philippe-Méden 2017: 57-58）。

海軍士官学校（École navale）を経て、1898年から海軍中尉（Enseigne de vaisseau de 1re classe）、1907年から海軍大尉（Lieutenant de vaisseau）とな

り、それに前後して1904年から海軍陸戦隊員学校(école des fusiliers marins)で兵士の体育を担当するようになり、また雑誌『身体教育(L'Éducation physique)』の編集者となり精力的に論文を寄稿し、有力な体育思想家と目されるようになる。1925年に、彼の考案した訓練法のメトード・ナチュレールは、陸軍でも兵士の体育として採用され、その後、ソ連も含めて、国際的にも体育の方法として影響を与えるようになっていく。もはやエベル自身の手を離れて、エベル主義(Hébertisme)と呼ばれる運動が広がり、エベル自身は1938年には、自分はエベル主義とは関係がないという声明を出すほどになった。1940年には、エベル自身の手を離れたエベル主義がヴィシー政権下のフランスで国民の体育方法として採用され、1960年代頃までは影響力があったが、その後は衰退し、忘れ去られていったと言われている。さらには、パルクールの登場前夜である1990年代にはエベル思想のリバイバルが起こり、現在も研究が続けられている(Philippe-Méden 2018)。

スポーツ史において、フランスがイギリス産の「スポーツ」という概念に敵対心を持たなくなったのは1880年代と言われている(Holt 2011: 616)が、エベルは、1912年に書いた論文のなかで、自らの少年期を振り返って、「最も激しいスポーツを実践していた」と記し(Philippe-Méden op.cit.: 58)、この事実からは、彼が体育思想を著述していくなかで、スポーツ概念との交渉があったことを示している。最終的に、1920年代の著作において、彼は、ある種の国際的なライバル関係のなかで、スポーツをアメリカ的なものに割り当て、機械化し、都市化して、自然を失い墮落した運動形態を示す概念だと告発し、反スポーツの立場を取るようになる。その結果、自身が開発したメトード・ナチュレール=自然な方法という鍛錬方法を、反スポーツの身体教育(l'éducation physique)の方法であると主張するようになる(Defrance 1997)。

エベルには、1902年5月7日にマルティーク島でペレ山の噴火に居合わせて、多くの人を救出したというエピソードがある(Philippe-Méden op.cit.)。

この経験から、エベルは、子供から大人まで、男性も女性も、体を訓練する必要があると説いていく体育思想家のキャリアを考え始め、後にパルクールでも受け継がれることになる「*être fort pour être utile*」（役に立つために強くあれ）という標語は、この時の経験から生まれたとされている（Philippe-Méden op.cit.）。

パルクールの語源となった仏語のパルクール・ドゥ・コンバタン（*parcours du combattant*）は、『ロベール仏和辞典』では「障害物通過訓練場」と訳されており、これはエベルが発案し、後にフランス軍に導入された野外での訓練場のことである。海軍で新人兵士の身体訓練を任されるようになったエベルは、体の個々の部位を機械的に動かし続けるトレーニングは、実践的に役立たないということで徐々に廃止するようになり、また装置や器具を使用したトレーニングも、機器が与える余計な外在的な力に反応するように体を作ってしまうので、廃止するようになっていった（Philippe-Méden 2017.: 60-61）。

ここまで引用してきたエベル研究の専門家フィリップ＝メーデンは、エベルが当時敵視していた軍事体育思想を特定するために、民族舞台学者のジャン＝マリ・パラディエ（Jean-Marie Pradier）の著作から引用して、19世紀のプロイセン軍が採用していた「ドリル」の性質を記述している。ドリルとは、繰り返し行う訓練方法のことである。

〔プロイセン軍が行っていた〕ドリルの第一の原理は、分離して繰り返し実施されるように、運動を単純な部分に解体することである。次に第二の原理は、身体運動を規格化し、命令によって兵士を動かせるように、外部からの合図で決まった動作を開始するものとする。（…）加えて、第三の原理が行軍の編成を決める。小隊は、あらかじめ幾何学的な形に配置され、どんな状況や人間的な理由があろうと、配置を崩さずに進むものとされる。（…）このドリルの目的は、感情を完全に支配した兵士を

生み出すことで、戦場での優位を獲得することにある (Philippe-Méden 2018: 26)。

フィリップ＝メーデンも述べているように、プロイセンの体育の方針は、工場労働におけるテイラー主義（フォード主義）に対応している。エベルが志向していたのは、プロイセン軍の機械ような動きではなく、アメリカ軍の海兵から感銘を受けた、個々が独立に状況に対応しながら動くような、しなやかな動きだった (Defrance 1997)。1920年代には反アメリカに転じるものの、1910年代のエベルは滞在したアメリカから感銘を受けていた。

軍事・体育思想上のこの転換を私たちの日常的なフィットネス文化の次元にまで引き下げて考えるならば、これは単純な動作を繰り返す筋肉トレーニングやエクササイズ・マシンを使った単調な動作によるトレーニングを実践的に役立たない訓練として棄却したということになるだろう。だから、トレーニングは、森林でのゲリラ戦といった実戦の場面を想定して、実際に野外の現実的な環境のなかで、実践的に行うことが最善であるという発想に至り、野外の森に障害物を設置して、そこを走り、移動することを通じて、実践的にトレーニングするという「障害物通過訓練場」の発想へと至っていく。パルクールにおいて「ラシェ (lâchés)」と呼ばれる、鉄の棒を掴み、振り子の動作の遠心力を使って、前に跳ぶ動作は、元々は、森のなかで木の枝を掴んで移動する動作に由来する。他にも先に示した要素から、メトード・ナチュレルとパルクールとの間の共通性を示すことができるだろう。筋肉トレーニング自体を続けることは実践的ではないという発想は、パルクールを行う「本場」は、都市の環境であり、それも場所によってまったく異なった構造物の環境に適応できるように実践的にトレーニングすることが重要である、というパルクールの思想に結びつく。

2-2. レイモンの語りにおけるエベル思想

パルクール・デュ・コンバタンという言葉が YAMAKASI に伝播させたのは、レイモン・ベルである。正確に言えば、レイモン・ベルが、息子ダヴィッド・ベルから「どうやってあなたはそれだけすごい身体能力が得られたのか」と質問された時に、「parcours で訓練したからだ」と答え、その方法をダヴィッドに教えたことで、伝播された（この時に parcours という言葉は、ダヴィッドのなかに印象強く残った）。そして後に、友人のユベール・クンデ（Hubert Kounde）からの助言を受け、ダヴィッドは、c を k に変えた、parkour という新しい綴りを生み出すことになる（Angel 2011:19, 197）。これらを伝えるテキストとして、ベル自身の語りの自伝的テキスト（Belle 2009）と、そのテキストに基づきつつ、YAMAKASI のメンバーに聞き取りを行いながら検討した Angel（2011）がある。

Kidder（2017）は、繰り返し、語られてきたエベルのメソッド・ナチュラルと現代のパルクールの関係を以下のようにまとめ、エベルの思想とパルクールとの違いに注意を促している。

エベルのナチュラル・メソッドと、消防士ベル一家のヒロイズムが、現代パルクールの起源となる神話を形成していることになる。この物語は、パルクールの練習会で語られたり、記者によって語り継がれたり、出版物やドキュメンタリー、ウェブサイトで主張されたりと、様々な形で繰り返されてきた。しかし、ナチュラル・メソッドの parcours は現在のパルクールとは違うということを指摘しておかなければならない。ベル家の年長者たちは、燃え盛る建物のなかで自分たちが生き延びるために、また閉じ込められた人々を救うために、パルクールのトレーニングをしていたのである。これこそが、エベルが思い描いていた、「役に立つために強くなる」という実用的な目的だったのである。逆に、若いベルとその友人たちは、パルクールで学んだことを遊びに応用していっ

た。(…)それは実用的な労働ではなかった。つまり、自然発生的で創造的な行為から得られる喜びのために行うことだったのだ(Kidder 2017: 19)。

ここで「神話」とされているのは、ダヴィッド・ベルらが語っていることに基本的な事実の誤りがあるということではなく、パルクールの起源に直接にエベルを見ようとする語りのことである。

キダーがエベルの思想とパルクールの思想を区別するのに当たって、まず共通点については、運動能力において目指される「バランス、調整(coordination)、スピード、強さの組み合わせ」のあり方をパルクールはエベルから引き継いでいるとしている(Kidder 2017: 20)。つまり、エベルが目指した運動能力の向上の方向性はYAMAKASIのメンバーの意図にちょうど合致していた。その上で、キダーが相違点として挙げているのは2つである。①トレーニングの場所を自然環境から都市の日常的な環境へと変えたこと、②運動における機能性よりもスタイル化した動きを重視したこと。

このように、これまでの研究においても、エベルからパルクールへと至る間における共通点と相違点が言われてきている。ここではもう少し共通点と相違点を検討してみることにしよう。ベルによる自伝的テキストも引用するが、自伝的テキストだからと言って確証の力が弱いと捉えるのではなく、エベル自身のテキストや、ダヴィッドが自伝のなかで伝えるレイモン自身の言葉、ダヴィッド自身の言葉、そして筆者がフィールドワークで聞いた日本の高度実践者たちの言葉といったそれぞれのテキストを対照させた時に、明らかに見られる思想や言説の共通な構造を捉えてみたい。これらの共通性の発見は、エベルからYAMAKASIに、そして日本のパルクール実践者へと通じながら、ダヴィッド自身が語る自伝の歴史的な正確さや誠実さを予見させる。

以下はダヴィッドによる父の伝記の要約である(Belle 2009: 23-30)。レイモン・ベルは、1939年に当時フランスの植民地であったベトナムで、フラン

ス人の軍医である父親とベトナム人の母親のあいだに生まれた。彼が生まれた都市フエは、ちょうど北緯 17 度線のやや南に位置し、フランスが建造に力を入れていた都市だった。7 歳の時、ちょうど叔父の家に遊びに行っている時に、第一次インドシナ戦争が勃発し、彼は実家に帰れなくなった。しばらく叔父の家にいたが、戦争終結の見通しはなく、叔父はレイモンを育てるつもりがなく、さらには虐待も加えるようになり、結局、フランス軍の孤児養護施設に入れてしまった。レイモンは、7 歳から、孤児たちのキャンプで、キャンプの周囲にある森を走りまわり、激しいトレーニングを続けたという。父親は勃発した戦争で亡くなり、母親は 6 番目の子であるレイモンをそれほど真剣には探さず、レイモンは本当に孤児になった。この幼少期の尋常ならざる環境の影響によって、彼は子供ダヴィッドを授かった後も、父親として通常の家を構築することができず、育児は母方の祖父に預けて任せることにした。しかしながら、7 歳から一人で生きていくために周囲の環境に対する異常に鋭敏な感覚鍛え、危機に備えた尋常ならざるトレーニングを繰り返していたことで、戦後に大人になったレイモンは消防士として奇跡的な救出を実演するようになる。フランス軍で培われていたエベル主義は、レイモンの尋常ならざる境遇を通じて、先鋭化されていたと言えるだろう。家庭をうまく作れなかったレイモンだが、ダヴィッドが 13、4 歳になると、接触が生まれ、人生訓や訓練方法を教えるようになる。

レイモンは 60 歳になっても毎日トレーニングを行い、非常に高い運動能力を維持していたが、60 歳でダヴィッドにメッセージを残し、頭を打ち抜き自殺し、この世を去ってしまう (Belle 2009 : 146)。パリに移住して来てからも、真冬でも庭にテントを張って生活していたというレイモンは、料理も得意であり、様々なことを息子ダヴィッドに教えたということであるが、その精神生活には、生涯のあいだ、幼少期から受けてきた暴力との格闘があったと言えるだろう。レイモンにとっては、日々のトレーニングの目的は、消防士として日々想像しうるような、生命に関わる危機的な状況を乗り越えるた

めのものだった。また自分の精神生活の危機を乗り越えるためのものでもあったのだろう。一方で、ダヴィッドたちは、消防士としてではなく、職業ではなく、遊びとして、パルクールへのトレーニングにのめり込んだということになり、先述のようにキダーは「遊び」として、エベルの思想とパルクールの思想を区別するわけである。そうは言っても、何のためにパルクールを行うのか、という目的性は、実践者本人にとっても、それを受け取る周囲の者にとっても、パルクールをめぐる重要な問いであり、それほど単純ではないだろう。

ダヴィッドが語る父レイモンのエピソードにも、エベルと同じように、尋常ならざる救出のエピソードがいくつもある。消防士として数々の表彰とメダルを受けたという話 (Belle 2009:25) や、Angel (2011:19) がダヴィッドに行ったインタビューによれば、レイモンには自殺を試みる寸前であった女性をジャンプして助けたというエピソードもある。

こういったエピソードも現実の状況での有用性を求める「be strong to be useful」と英訳されるエベルの言葉との親和性を示すものであるが、そのように現実のあらゆる環境に適応する（これは消防士や兵士の職業倫理とも合致する）ための方法として、レイモンがダヴィッドに提示したものが、軍隊のキャンプで7歳から続けていた、parcours (du combattant) という方法であった。レイモンは、parcours を人生に例えながら伝えており、ここには体育思想として形成しようとしたエベルの言説の影響を見ることができる。伝えられているレイモンの言葉 (Angel 2011:19-20) から、エベル主義に引きつけて重要な要素をいくつか挙げるならば、①障害物を乗り越えることに繰り返し挑戦しながら、最良の技術を探求し、何度も試すという態度、②その瞬間に役立つように動けるためには、心身とともに常に準備ができていないといけないという態度、を挙げることができるだろう。

レイモンは、ダヴィッドに言葉を与えただけでなく、YAMAKASI のメンバーともなるベル家（一族としてベトナムからパリ郊外へと渡ってきてい

た)の親戚の者たちであるチョウ・ベル・ディン (Châu Belle Dinh) やウィリアム・ベル (William Belle) を、森や公園に連れ出し、「これができるか?」と問いかけながら動きを実演し、教えた (Angel 2011: 18)。パルクールのような動きの探求や練習は、ベル家にとって、放課後や休日の遊びだった。

ここでパルクール・ドゥ・コンバタンという障害物を使ったトレーニングという発想は、後に YAMAKASI を作ることになる 10 代半ばの友達グループのなかで、パリ郊外の様々な建築物を障害物と見立てて、トレーニングするという発想に変わっていく。強調しておくべきは、フィットネスクラブや特定の器具を使ったトレーニングなどの、非実践的なトレーニングという方向性を持っていないという先のエベルの思想との共通点だろう。

ダヴィッドは、「ジムでトレーニングをしますか」、というインタビューアの質問にこのように答えている。

いやしないよ。私は木を登ったりしてトレーニングをする。(…) 私にとってフィットネス・ルームは、よい見た目になるためとか、ヒーマン [アメリカ漫画の筋肉質なキャラクター] になろうとして筋肉のための筋肉をつくるゲームのようなものだ。しかし、結局は役に立たないね。真のパルクール信奉者ならば、筋肉は、外の環境で、手もとにあるものを使って、自然な仕方ですつけられなければならない。ジョルジュ・エベルのメトード・ナチュレールに少し似ているね。彼は、軍隊にいた時、水兵のために船の上の狭い場所でもトレーニングをする方法を開発していた。運動の仕方をいくつかに分類したのさ。走る、跳ぶ、泳ぐ、持ち上げる、投げる、登る、引っ張る、運ぶ、などにね (Belle 2009: 61)。

これらの検討から見えてくるのは、パルクールというものを特定の身体動作のフォームの集積体として定義づけるということが難しいだろう、ということだ。それぞれの場所に適応するという発想からは、むしろフォームを固

定化することには不利益が生じる。師匠から弟子への継承の接触面においては、確かに具体的な身体技術指導が多く含まれるにせよ、それに加えて、思想の伝播も含まれている。そこでフォーム以上に思想が様々なフォームをつなぎ合わせるものとして重要になってくるだろう。

3. メディアを通じた世界への伝播

以上のように、後世から遡及的に見た視点ではあるものの、エベル、レイモン、ダヴィッド、パリ郊外の原初グループのなかには、体育思想上の共通点が、もちろん相違点には注意しなければならないにも関わらず、見つけることができる。

このように形成された原初パルクールは、映画を通じて世界中に伝播するようになるのだが、原初グループがメディアの世界に知られるきっかけになったのも、パリの消防士の世界を通じてであった。ダヴィッドの兄ジャン・フランソワ・ベルがパリの消防士として働いていたことはすでに述べたが、このジャンが、弟たちのグループの驚異的な動きを知っていたため、パリの消防署のイベントで、パフォーマンスをしないかと声をかけたことがそのきっかけだった。1997年に行われたこのイベントでのパフォーマンスによって、それまでは数人のグループで行われていた秘教的なトレーニングが広く知られるようになった。

消防署でのイベントに向けて、グループが付けた名前がYAMAKASIであった。日本語のような響きを持つこの言葉は、グループのメンバーの一人、ギレン・グヌバ=ボイエケ (Guylain N'Guba Boyeke) の出身ルーツである、1960年にフランスから独立したコンゴ共和国で話されている言語のひとつであるリンガラ語で、「強い精神」を意味するようだ (Angel 2011 : 35)。パルクールのルーツのひとつとして、YAMKASIのメンバーは、スパイダーマンなどのアメリカンコミックや日本の漫画 (『ドラゴンボールなど』) を挙げている

(Angel 2011 : 30)。映画や漫画のヒーローのような動きを探求するという趣味がそこにはある。消防署での初めてのパフォーマンスは、忍者の格好をして行われたという (Wilkinson 2007)。

このパフォーマンスで弟に自信を持った兄ジェフは、グループでの練習の様子を撮影した動画を、国营放送 TV チャンネルのひとつ France 2 で日曜日に放送されていたスポーツ番組の Stade 2 に送った (Belle 2009 : 78-79; Angel 2011 : 35 ; なお Angel の記述では Stade 2 は French TV channel Stade2 とされているが、チャンネルではなく、1975 年からやっている老舗のスポーツテレビ番組である)。送られた映像を見て、Stade 2 からはジャーナリストのフランシス・マルト (Francis Malto) がやってきて、取材をし、映像を撮った。この映像は、持ち帰られ、テレビ局のプロデューサーやディレクターたちによって回覧された。ここから様々なテレビ番組の企画が動き始めることになった。これらの一連のテレビ出演によって、YAMAKASI は急速に有名になっていく。この時期 (1997 年) に、ダヴィッド・ベルと並ぶ、初期メンバーの中心人物であるセバスチャン・フーカンは、Stade 2 に出演し、映像作品にも色気を持っていたため、自分たちのやっていることに「art du déplacement (移動の芸術)」とする名前を初めて与えた (Angel 2011: 35-36, 291)。

これらの急速なメディア進出という出来事によって、大きな2つの変化が起こる。ひとつは、原初のパルクールを一緒にやってきた、消防署でも一緒にパフォーマンスをした幼馴染みのメンバーに亀裂が入ったこと。もうひとつは、『グランブルー』『ニキータ』『レオン』などで知られる映画監督リュック・ベッソン (Luc Besson) から声がかかり、グループで出演して、映画が制作されることが決まったことである。

1997 年に YAMAKASI は消防署でのパフォーマンスとテレビでの出演で有名になるが、ダヴィッド・ベルとセバスチャン・フーカンは、YAMAKASI と名乗ることはすぐにやめた。この間の出来事でグループに亀裂が入り、それ

が色々複雑な現象を生み出していくことになる。

たとえば、ダヴィッドは、自伝的インタビューのなかで YAMAKASI を当てこすり、「サムライだとか、ニンジャ・タートルズみたいなものに入りたい気はまったくなかった。彼らを止めるつもりはない。どうしようが彼らの自由だ。だけど彼らのほとんどは、パルクールの根底にあるものについて、何もわかっていなかった」とパルクールに対する認識の違いを強調し、グループから離れた理由を説明する。リュック・ベッソンは、ベルの自伝的インタビューに寄せた序文のなかで、ダヴィッド・ベルと YAMAKASI のあいだを修復しようと用意した話し合いの場の様子を語っている (Besson 2009 in Belle 2009: 14-15)。ベッソンは、YAMAKASI と映画作りの話を進めていたが、ダヴィッドとのあいだに起こっていた諍いに当初は気づいておらず、慌てて修復の場を持った。ダヴィッドと YAMAKASI は嫌い合っている仲ではないとは言え、ダヴィッドは独自の方針から YAMAKASI に入るつもりはないと断言したので、ベッソンは、YAMAKASI 出演の映画とダヴィッド出演の映画 (後に『アルティメット (*Banlieue 13*, 2004 年)』として実現する) の両方を作ると伝えて、その場を収めた。

この時期には、1998 年に、映像作品 *Speed Air Man* (YouTube で検索すれば見るができる) が、他のメンバーは抜きで、ダヴィッドだけをフューチャーして撮影されたことも重要だろう。3 分ほどの短い動画であるが、ダヴィッドの友人がインターネットにアップすることで、非常に有名になり、パルクールとは何かを広く人々にイメージさせる最初期の作品となった (Angel 2011: 54)。

リュック・ベッソンとのつながりのもと、YAMAKASI のメンバーは、2000 年の『TAXI2』に忍者の衣装を着て敵役としてパフォーマンス、2001 年には主演作品、その名の通り『YAMAKASI』という作品名で、パルクールの動きを映画の中心に据えたアクション物語映画を作っていく。

これ以降のメディアを介したパルクールの世界的伝播については、今特集

号のメンバーで翻訳し、近刊予定である Kidder (2017) の第一章の記述を参照してもらうことにしよう。しかし、なかでも最も重要な映画作品として、*Jump London* (2003年) と *Jump Britain* (2005年) については、触れておこう。

ダヴィッド・ベルが YAMAKASI とは違う独自の道を歩もうとしたことはすでに述べたが、もうひとりの中心人物であるセバスチャン・フーカンも、消防署でのパフォーマンスから急速にメディアの注目を集めるなかで、YAMAKASI を離れて、独自の路線を作っていった。*Jump London* は、イギリスの公営放送 Channel 4 が制作し、フーカンをフューチャーしたドキュメンタリー映像作品で、フーカンがロンドンの旧所名跡（シェイクスピアで有名なグローブ座など）をパルクールの動きで跳び、登り、越えていく姿を撮影したものだ。この作品を通じて、フランスという枠を越えて、世界中に、特にイギリスにパルクールが広がったということ、またこの作品のなかで、フーカンは、パルクールを翻訳して、フリー・ランニング (free running) という新しい英語名称を与えたこと、という点で、この作品は歴史的に重要である。フーカンは、1997年の *Stade 2* の出演時に *art du déplacement* という新しく考案した名を与え、またしばらくは *parkour* という名称も使用していた (Angel 2011 : 39) が、2003年からは *free running* という新しい名称をまた生み出す。

parkour という名称は、ダヴィッド・ベルがメンバーとの諍いのなかで自分が作り上げてきたものの独自性を示すために、1997年に採用する。そして1997年にフーカンが発案した *art du déplacement* は YAMAKASI が使う名称となり、フーカンのほうは、*free running* を自分のスタンスを示す言葉として使うようになる。

この結果、パルクールには、3つの名称が同時並行的に存在し、ある時期まではそれぞれの名称の違いにしたがって、スタンスが違うということがインターネット上で論争されることになった (Kidder 2017 : 29-30)。もっと

も、この名称の違いは、幼馴染の原初グループが方向性の違いから分裂した結果であるのだから、そこに違いを読み取ろうとすることも当然だろう。

キダーは、米国シカゴの実践者を2010～2014年にかけて調査したが、2011年の頃はまだ、パルクールとフリーランニングの違いを論争する実践者がいたという。ところが、2014年頃にはあまり違いを気にしないという態度が一般的になったとしている(Kidder 2017: 30)。

これらの論争の元は、ダヴィッドがインタビュー記事などで発した競技大会を否定的なものとして捉える言葉への解釈であったり(パルクールは非競争的な文化である)、あるいはフーカンが*Jump London* や *Jump Britain* で見せた動きの映像を解釈すること(フリーランニングは、フリップを多用し、人に見せる動きを重視する)で生じた。一時期は、この2つは二元論的な言説の構造を取っていた。パルクール…競技大会の否定、見せるパフォーマンスの否定、移動の機能性やそれを追求したトレーニングの重視。フリーランニング…競技大会の肯定、見せるパフォーマンスの肯定、フリップによる華々しい動きや自己表現の重視。

キダーは2014年頃には、コミュニティ内で散々論争が繰り返された挙げ句、それらの区別は「どうでもいい」という空気になっていったとしている。しかし、近年はこれらの議論は比較的、正面から議論されなくなっているとは言え、「パルクールとは何か」という問いは、現在進行系で存在する以上、今後も過去にあった議論の歴史として重要であり続けるトピックであろう。例えば、直接の対応関係に置くことはできないにしても、国際体操連盟が2017年からパルクールを競技化しようとして開発した「スピードラン」と「フリースタイル」という種目の二部門制は、この時代の論争の区分を残しているとみなせる(移動の機能性の追求という思想は、タイムの計測に還元される思想ではなかったと言わなければならないにしても)。

そしてこれらの論争が盛り上がり、また下火になっていった要因として筆者が考えており、先行研究でも指摘されていない点がある。Kidder (2017)

によれば、2000年代初頭からのパルクールの歴史を掘り起こすと、2000年代のネット・コミュニティは、イギリスのUrban Freeflowといったかつて存在していたサイトに代表されるように、テキスト・ベースによる交流を行っていた。YouTubeは2000年代から存在してはいたものの、スマートフォンの普及やカメラ性能の向上、誰でもYouTubeに動画を上げるような雰囲気といった動画ベースのネット交流の条件が揃ってくるのは2010年代に近づく頃である。テキスト・ベースの頃は、言葉でのみやり取りするので、どうしても、パルクールかフリーランニングか、という概念定義の論争になりやすい。しかし、2010年代以降の映像コミュニケーションの爆発的な普及は、概念論争そのものをマイナーなコミュニケーション形態にしてしまった。そして現在は、フリップや自己表現のスタイルといった「見せる要素」はパルクールにとって重要なアイデンティティとなってきているように思える。これらは映像コミュニケーション環境の進歩によるものだろう。

4. 日本のパルクール史の素描

ここまで書いてきたパルクール史やその前史は、日本のパルクール史を描いていく時のいくつかの論点を示しうる。包括的な歴史を記述するためには、現状では、資料やインタビュー調査も不十分であるものの、探索の方向性を示せる程度の素描は行ってもいいだろう。

筆者は2020年3月に仙台のパルクール・コミュニティでの調査を行い、2021年1月と3月に名古屋のパルクール・コミュニティ（岐阜のコミュニティからの参加者も含む）での調査を行った。まだ日本の他のコミュニティについての調査が進んでいるわけではないので、あくまでも現調査時点での歴史的素描として記述しておきたい。筆者が話を聞いている実践者のうち、もっとも早くからパルクールの実践を続けている者は2007年から始めた者と2008年から始めている者の2名である。

名古屋（および岐阜）のコミュニティでは「masatin（まさちん）」さんごと、青木雅弘氏（2007年から実践）、仙台のコミュニティではパルクール専門ジム（仙台市ではなく富谷市にある）を経営している石沢憲哉氏（2008年から実践）から話を聞くことができた。

またWebサイト上でまとめられている『日本パルクール史年表』²⁾は、典拠を提示しながら記述されており、両氏の話と合わせて見ていくと、かなり有用であることがわかったので、そこからも補足的に引用することにする。

4-1. テクストベースの時代とチーム結成の時代

Kidder（2017）が示しているように、パルクールは、お互いをトレーサーと呼び合う集団なりチームが形成され、コミュニティと呼ばれる集団のなかで実践されるものであり、それは日本においても変わらない。基本的には「ジャム」や「練習会」と呼ばれたりする場が設定され、そこで共に練習する関係性が、パルクール・コミュニティと言えらるだろう。ただし、実際に練習会を共に行う関係性を超えて、インターネット上には様々な情報をやり取りする関係性も存在する。ここで簡単に見ておくのは、コミュニティの基盤となるインターネットの情報環境であったり、コミュニティ間の情報交換の基盤となる環境の変化である。

2007年からパルクールをはじめた「masatin」さんのこの愛称はインターネット上で使用されてきた名前である。もうひとり、名古屋で話を聞いた高橋翔太氏は、2009年にパルクールを始めて、今は広告や映画のスタントでも活躍するパルクール実践者であるが、彼の「こしあん」という愛称は、2chのパルクール・スレッドでハンドルネームとして使われていたものである。インターネット上のハンドルネームで呼び合うという現象は、Kidder（2017）も、米シカゴのトレーサー集団のなかで行われていたと報告している。

2007年頃の初期の状況について、masatinさんごと、青木氏は以下のように語る。

最初の仲間はネットでみつかったんですか？

青木氏：そうですね、Mixi がありましたね。モバゲー、Mixi がありました。最初は Mixi で四人ぐらいで集まってやってたかな³⁾。

『日本パルクール史年表』には、2007年10月に名古屋オフ会がはじまるがあるが、これは masatin さんが主導して、名古屋で活動していたパルクール・チームを集めたオフ会をはじめたということだった。Butterfly-Japan はこの頃に、masatin さんが作ったチームである。今はやや下火になっているものの、当時は、パルクールのチームを作り、チーム名をつけるという活動がパルクール・コミュニティの活動様式だった。また青木氏は2009年に開催された Red Bull 主催の Art of Motion という初期の世界大会に、日本代表の数名のなかに含まれて、出場している。

当時は、動画をインターネット上にアップロードし、やり取りする環境はそこまで充実していなかった。

青木氏：直接、ここ〔モバゲーのパルクール・コミュニティ〕に直接、〔動画を〕アップできたんですけど、モバゲーで動画をアップできなくなっちゃって、そこからちょっと〔モバゲーのコミュニティは〕衰退しましたね。…2008年くらいからやってますね、モバゲーは。

これ当時、動画はどれくらいの長さだったと思いますか？10秒とかですか。

青木氏：そうですね、短かったですね。8秒とか。

当時は、撮影機材（いわゆる「ガラパゴス・ケータイ」の動画撮影能力）

やネットのサイトやサーバーの能力に限定されて、長い動画や解像度の高い動画をアップロードして、共有する環境はなかった。せいぜい数秒の動画を共有することが限界であり、テキストベースでのやり取りが遥かに重要であったのである。当時の動画は解像度が粗かったので、手を付いた時に、どういう向きで手を付いているのかが、動画からはわからず、想像したり、また想像しながら練習のなかで手の動きを試したりしていた、という話を、当時を知る複数の実践者から聞いた。

名古屋では、初期は、各地のチームを集めるという形で、十数人の規模とは言え、地域的には広範囲から集まって、練習会をする企画があった。

青木氏：今と昔の違うところは、昔は、すごい広い範囲から集めて練習会をやっていたんです。今は、LINEがあるんで、仲間内で集めて、それぞれ練習するみたいな違いがあります。大きい練習会というのは少なくなっていますね。(…) 小さい規模でも集まれるようになっていきますね。昔はあちこちから集めてこないと人数を集めてこれなかった。

パルクールの実践者が日本で増えていったということも関係しているが、メディア環境の変化は、コミュニティの形成の仕方も変えていっている。まだ深く研究ができていないものの、2000年代と2010年代の大きな変化は、パルクールのスタイルの変化でもあり、コミュニティやネット環境の変化であるという観点から、見ていく必要があるだろう。

またパルクールの思想の伝播については、みな最初にパルクールを知ったきっかけには、YouTubeで動画を見たことを挙げ、そこから見様見真似でパルクールを始めて行ったということを語っているが、では、パルクールの思想は、そういった見様見真似だけで広がっていくのだろうか。

技術というよりも、パルクールの遊び方と言いますか、体の動かし方

じゃなくて、基本的な考え方は… [パルクールの思想などはどうやって知ったのですか?]

青木氏：そういうのは最初の頃は、僕もわかってなかったと思うので、みんないっしょに育ったと思います。SNS 全体で育っていく感じだと思いますけど。

このあたりも、まだ探求が不十分であるものの、いくつかの条件は想定できる。第一に、テキストベースのサイトでのやり取りを通じて、海外のYAMAKASIなどの原初グループの言説が翻訳されて伝わってくるということがあるだろう。第二に、実際に、フランスやイギリスに行って、YAMAKASIらと交流する日本の実践者が現れたり、日本でArt of Motionの開催などをきっかけに、海外のトレーサーと日本トレーサーが直接に交流する機会が生まれてくるということがある。これらの経路は、パルクールの思想を日本に伝えることに貢献してきていると予想できる。この辺りは、今後の調査のポイントになるだろう。

4-2. 日本の実践者たちが語るパルクールの思想

さて、本稿では、前半部で、パルクールの歴史から、パルクールの思想がどういうものであったかの要素を抽出してきたわけであるが、日本の実践者たちに対して筆者が行ったインタビューから、パルクールの思想が現れている語りを見えることにしよう。

筆者が10年以上の実践経験を持つ高橋翔太氏に行ったインタビューのなかで、筆者はパルクールの競技化に対する実践者側からの反発を期待して、「大会で点数が付くわけですが、その評価基準に対してはどう思いますか」と質問したが、氏からの答えは筆者にとって意外なものだった。氏は日本体操協会が主催した2019年の第一回の公式大会にも出場して、フリースタイル

部門で決勝に進出するなど選手としても実績を持ち、広告や映画のスタントとしてのパフォーマンスの仕事を行うなど、メディアを通じてプロとして活動している人物でもある。

高橋氏：僕は特別ないですね。評価基準を事前に伝えてもらっているの
で。なんだろうな、これがパルクールじゃないとか言い出したら、それ
こそパルクールじゃないと思うんで。だから、大会は大会っすね。(…)
大会の審査員に対して、どれだけコミットできるかっていうパルクール
ですね、大会は。だから評価基準が、なんかこう、間違っているか、間
違ってないとか言うのはパルクールじゃないです。(…) 大会が強いト
レイサーはいるけど、なんだろうな、大会自体がパルクールのすべてで
は全然ないですね。(…) パルクールを使って大会をしているってだけ
ですね⁴⁾。

この発言を読み解くには、複雑なコンテキストのなかに位置づけなければ
ならない。スケートボードやスノーボードについての研究のなかで、競技化
に対しては元々の活動の精神に反するという声が実践者の側から上がった
と言われてきた (Wheaton 2013=2019)。パルクールもまた、それらの「ライ
フスタイルスポーツ」と共通の特徴として、スケートボードと比較をすると、
都市環境で行われ、専用の競技場を持たないスポーツとして発展したという
共通性を挙げることができる。そのため、パルクールにおいても、元々競技
として発展していないことから、国際体操連盟がパルクールを体操の正式種
目として認めた2017年の決定に対して、世界的に反発の声が上がった⁵⁾。し
かしながら、実践者たちから反発の声が上がったにせよ、上記のインタ
ビューで語られた論理は、非競争的な文化を競技化することにただ反対であ
るというものではまったくない。

多様な環境に適応するというメトード・ナチュレール由来のパルクールの

思想というここでの関心から見ると、上記のインタビューの発言は、大会の環境に適応することもパルクールのひとつであるという考え方によって、「あらゆる環境に適応する」というパルクールの思想を表現してしまっている。したがって、また当然の帰結として、他のスポーツのように、大会の環境だけが真正の競技環境となることはありえず、あくまでも多様な環境のなかの一つにとどまる。先行研究（Wheaton 2013=2019）では、スケートボードで起こった動向と照らし合わせて、競技化への反発は、かなり単純化されて、説明されていた。しかしながら、パルクールは、スケートボードとは異なった、メトード・ナチュラル由来のエベル主義の思想を持つために、競技化の反発の論理はかなり異なったものとなっているのだ。

興味深いことに、エベルは、器具を使ったトレーニングや体操に対して、「役に立たない」という評価を与えていた。ここでも筆者の能力を越えてしまうが、体操史のなかで、ヤーンが作り出した器械体操や器具を使ったスウェーデン体操に対して、エベルが示した拒否の立場とその思想を考慮すると、そこにやはりパルクールの思想との連続性は見えてくる。パルクールは単一の環境に適応するものではない、という考えが、実践者の語りのなかでもよく聞かれる。

高橋氏：やっぱり、最初、始めた頃の頃は、この場所じゃないとこの動きができないようになってくると思うんで。（…）幅とかがあるんですよ。ちょうどいい幅の、ヴォルトとかしやすい幅の、でこぼこしている、公園だったりスポットだったり（…）芝生だと、宙返りが好きな人とかは面白くなるし。その人のスタイルに合って、それは全部違うですね。ちなみに僕はもうどこでも楽しいですね。その状況に応じてできることって変わるじゃないですか。

この語りでは、スタイルという概念によって、単一の環境にのみ適応する

あり方も、その人のひとつのスタイルであると肯定されている。また彼がインタビューのなかで繰り返していた言葉である「パルクールには答えがない」という思想が、スタイルという概念を下支えしている。しかしながら、ある程度の技能の獲得が、多様な環境で楽しむことを可能にしていく、という理想もここでは語られている。

エベル主義と親近性が高いと思われる「初期」のパルクールは、今の日本では、私はいくつかのフィールドワークの現場で聞いたのであるが、「移動系」(art of displacement に由来する)と呼ばれることがある。つまり、今では、実践者のなかで、必ずしも「移動系」の思想だけで、パルクールが捉えられているとも言えないのかもしれない。シカゴの実践者を2010～2014年にかけて調査したKidder(2017)の研究は、ちょうど移動系から次の世代への移り変わりを調査できる時期に当たっていたように思える。Kidder(2017)は、実践者たち自身の説明のなかでは、「A地点からB視点へとできるだけ速く効率よく移動すること」という説明が頻出するものの、実際に彼らの練習を観察していると、重要なのは、速さや効率よりも、スタイルであるとしている。以上のことを総合すると、多様な環境のなかで、その瞬間に、身体動作のなかにスタイルを生み出せるかどうか探求されている、という形で、エベル主義における多様な環境への適応という思想は、スタイルの探求へと、パルクールのなかで深まったと言える。

スタイルという概念は、パルクールが現代において広告的価値を持つことも説明する重要な概念であるし、フィットネスとしても需要があるのは、フィットネスというものが健康の追求であるだけでなく、身体のラインの追求、さらには身のこなしといった身体運動のスタイルの追求であるからであろう。

このように、日本の実践者の語りからも、パルクールの思想が日本に伝播しているということを伺うことができた。まだ歴史の素描は、はじまったばかりであるが、これらの歴史の探求は、パルクールとは何か、今後のパル

クールはどういう方向に行くのかを考える上で、重要な手がかりを与えるだろう。本稿は、日本で充実したパルクールの学術的な記述がないなかで、最初の素描を試みた。日本のパルクール研究がこれから深まることを期待して、結語としたい。

注

- 1) パルクールの創始者グループである YAMAKASI の歴史については、Angel (2011) がメンバーに対して繰り返しインタビュー調査を行って書かれたものとして、現在、もっとも詳しい文献である。Belle (2009) は、中心メンバーのダヴィッド・ベルが出版した、パルクールの形成過程や自分の父親についてインタビュー形式で語っている書物であり、ダヴィッドの父親レイモンについての Angel (2011) の記述はこの書に依拠しており、現在のところ、パルクールの起源を記す第一級の資料となっている。
- 2) <https://www.wikihouse.com/pkc/index.php?%C6%FC%CB%DC%A5%D1%A5%EB%A5%AF%A1%BC%A5%EB%BB%CB%C7%AF%C9%BD> (2021年8月30日最終閲覧)
- 3) 2021年3月20日に長久手市で青木雅弘氏にインタビューを行った。
- 4) 2021年3月19日に愛知県長久手市で高橋翔太氏に対して行った。なお、インタビューには、氏の友人でパルクールを一緒にやっている大学生と高校生の男性2名も参加するグループ・インタビューとして行われた。
- 5) 長くなるが、よくまとまっているので、日本パルクール協会のHPが掲載している競技化に対する反発の経緯を引用しておこう。

2017年、国際体操連盟 (FIG) は突如としてパルクールの国際連盟となりワールドカップを開催すること、パルクールを体操の管轄種目とすること、また一度も公式な世界大会が開催されたことのないパルクールをオリンピック体操競技における1種別として提案することを各国のパルクール協会への事前の相談なく宣言しましたが、パルクールは独立したスポーツ (運動方法) ですので、体操競技とは一切関係がありません。この事案を受け、英国パルクール統括団体 Parkour UK を筆頭に各国パルクール協会、パルクール団体および国際パルクール組織「Parkour Earth」より、国際体操連盟の行動を「不正であり侵害である」とする抗議の公開書簡が数多く提出されました。パルクールと体操は、お互いに練習施設を共有しうるスポーツ同士ではありますが、日本パルクール協会は Parkour UK および国際パルクール組織「Parkour Earth」の考えに賛同し、「パルクールは体操ではない」「パルクールは独立したスポーツである」と考えています。(https://parkour.jp/about-parkour/ (2021年8月30日最終閲覧))。

参考文献

- Angel, Julie, 2011, *Ciné Parkour: a cinematic and theoretical contribution to the understanding of the practice of parkour*, Createspace.
- Atkinson, Michael, 2009, "Parkour, Anarcho-Environmentalism, and Poiesis", *Journal of Sport and Social Issues* 33 (2): 169-194.
- Belle, David, 2009, *Parkour: texte et entretiens de Sabine Gros La Faige ; [préface de Luc Besson]*, Interview.
- Bourdieu, Pierre et Loïc Wacquant, 1998, « Sur les ruses de la raison impérialiste », *Actes de la Recherche en Sciences Sociales*, 121-122 : 109-118. (=2009年, 「帝国主義的理性の狡知」, 水島和則訳『国家の神秘』藤原書店)
- Defrance, Jaque, 1997, "La méthode Hébert entre l'Amérique et les sauvages", *Revue EP&S* n° 266 : 9-12.
- Kidder, Jeffery, 2017, *Parkour and the City: Risk, Masculinity, and Meaning in a Postmodern Sport*, Rutgers Univ Press.
- Philippe-Méden, Pierre, 2017, "Georges Hébert (1875–1957) : a naturalist's invention of body ecology" in Bernard Andrieu, Jim Parry, Alessandro Porrovecchio and Olivier Sirost eds., *Body Ecology and Emersive Leisure*, Routledge :24-30.
- Philippe-Méden, Pierre, 2018, « Georges Hébert : un pionnier de l'écologie corporelle ? » in *Corps* n° 15 : 57-65.
- Wheaton, Belinda, 2013, *The Cultural Politics of Lifestyle Sports*, Routledge. (= 2019年, 市井吉興・松島剛史・杉浦愛監訳『サーフィン・スケートボード・パルクール: ライフスタイルスポーツの文化と政治』ナカニシヤ出版)
- Wilkinson, Alec, 2007, "No Obstacles : Navigating the world by leaps and bounds.", *The New Yorker*, April 16 2007 issue.

謝辞

本研究は、立命館大学人文科学研究所助成プログラム（2019年度若手研究者研究支援：研究課題名「日本におけるパルクールの早期実践者の取り組みとスポーツ思想についてのフィールド調査（ライフスタイルスポーツ研究会：研究者代表 加藤雅俊）」および2020年度人文科学研究所助成プログラム：研究課題名「スケートボードとパルクールを対象にしたアーバンスポーツと都市の景観開発、都市政策、観光政策をめぐる社会学的研究（アーバンスポーツ研究会：研究者代表 市井吉興）」の助成を受けたものである。また調査を受けていただいた仙台（富谷市）と名古屋（および岐阜）のパルクール実践者の方々およびその御家族の方々に厚く感謝を申し上げます。